

オリンピックが“競技用自転車の進化”を促進させました

2020年東京オリンピック自転車競技出場選手の自転車約“70%”に日本製自転車部品が使われます。そして、多くの日本人選手が、日本製の自転車（フレーム。コンポーネンツ）を使用して、オリンピックでのメダル獲得を目指します。

過酷であるロードレースでは、高性能で品質が高く信頼性の高いサイクルコンポーネンツが求められ、その中でも特に、変速機、ギア、クランク、ブレーキ、ペダル、車輪などメイン部品は、日本製が求められメダル獲得には欠かすことができないと言われていています。

2020 東京オリンピックロードレース コース

男子：総距離：244 km 獲得標高：4,865m、最高高度：1,451m

女子：総距離：147 km 獲得標高：2,292m、最高高度：1,121m

オリンピックの自転車競技は、1896年第1回アテネ大会から正式種目となっているほど、自転車競技には歴史があります。機材の優劣も競技成績に影響する自転車競技では、機材となるレース用自転車の研究開発も盛んに行われて来ました。

今日、日本のサイクルコンポーネンツ（主要自転車部品）が、日本の高度な技術で造られ世界で最も高性能と評価されるまでに至った経緯は、1964年の東京オリンピックまで遡ります。

1964年東京オリンピックを目指し、官民挙げてフレーム、コンポーネンツの開発に取り組んだことで、高性能なフレーム、コンポーネンツを開発、設計、製造する技術が日本の自転車産業の中に根付きました。

1964年東京オリンピックに出場した日本選手は、日本製のフレーム又は、イタリア製フレームを使用しましたが、残念ながら日本製フレームを除くコンポーネンツ（部品類）は国際水準に達することができず、イタリア製を使用しました。

1964年東京オリンピックから半世紀、その様相は全く変わり、今や日本製のコンポーネンツ（部品類）を使わなければメダルを獲れないとまで言われるようになり、世界中の選手が日本製コンポーネンツを使用するようになりました。

今回の展示を通じ、約半世紀の間にどのように自転車が進化したかをご覧ください。